

いたもので、詩は極く少ない。元代の樂書がまるで近頃書いたやうに濃い墨色を呈してゐるのに、清代末の光緒位のが案外消えかゝつた例がある所から見れば、樂書にも墨を選ぶ必要があるらしい。金代のは多くの場合大定の年號ので、その他のものは氣づかなかつた。大定の中では第二層目に「大定十一年八月初五日……」とあつたのが最古の一例らしく思へた。勿論精査すれば更に古いのが見出し得られるだらうが。

以上、内部で見た所を略記した。外部で附言したいのは、萬部華嚴經塔と刻んだ初層の入口上部にある篆額が、どう見ても民國十□年の石碑の文字とよく似てゐるので、同年重修の時に加へたものらしく、従つて塔の名稱の根據とし難く思はれる點である。また昨年觀察が不十分だつた土城については、今年も亦調査が殆んど出来なかつた。しかし注意して見ると塔は土城内の西北隅にあり、北側の土壘から約百米位離れてゐるやうであつた。土壘と言つても高さ一米餘に過ぎないので、殆んどそれと氣付かない程度である。しかし嘗ては可成り明瞭だつたらしく、現在の軍用地圖にも土城が記載せられ、一邊約五百米位もあつたやうであ

る。

## 附記

今度の調査には吉田部隊の方々や電設會社の方々になんか御骨折を賜はつたことを感謝し、また同行せられた滿鐵の安齋庫二氏、小沼正氏にも御世話になつたことを御禮申し上げる。

尙ほ厚和のラマ寺についても訂正及び追記したいことが多いが、それは別に建築雜誌に掲載することにした。

(昭和十四年十月末稿)

## 北京通信

目下南文方面旅行中の小野學士より十一月十日付、南京發にて左の如き便りあり、

筆不精なので遂にものを書くことがいやになり、見れば見ただけ、聞けば聞いただけと云つた次第、邯鄲で下車し、古趙城を極めんとしたが警備の都合がつかないので大したことはないと思ひながら遂に斷念。彰德では再び股墟に行き更に鄴都を一瞥、開封では忙がしい一日の見學。博物館、其他猶太人の子孫などを訪ふことが出来ました。徐州も亦實に忙しく、東波の賦碑などローソクをともして見ると云ふ有様。水野兄と別れ、蚌埠から南京に至りました。南に來るに従つて氣温も高く、冬仕度では暑さを感じます。南京は今度随分爆撃を受け、痛ましい程になつて居ります。然し復興氣運は盛んで、さすが大都市だと思ひます。

(七十頁へ續く)

石磴〔15〕管太康九年〔16〕 泗川某縣の水磴宋太平興國三年 山東費  
 縣蒙山の石磴金貞祐元年〔17〕 があるが、いづれもめつた  
 にないものである。宋以後の硯銘などはいまに傳るも  
 の至つて多く一々あげきれぬ。

①『金石萃編』卷七十に「大唐虔鄉令劉君幡竿銘」がある。

②「寶相寺石幡竿題字」。『寰宇訪碑錄』卷六箸錄。

③「王坵池幡竿石側題字」。『寰宇訪碑錄』卷八、山東泰安に  
 ある。

④「宣和三殿幡竿石座題字」は『寰宇訪碑錄』卷八箸錄、山東  
 泗水にある。

⑤「宋法喜寺周良弼幡竿石題名」〔金石彙目分編』卷七、海  
 鹽縣の條箸錄）

⑥石燒臺頌（天寶十一載）『八瓊室金石補正』卷五十八）

⑦『金石彙目分編』卷十之三、諸城の條に「宋蔡澤施蓮花石  
 釘記」及「宋青州客王佺施石釘記」を著錄する。何れも大  
 中祥符元年のものである。

⑧葉昌熾の石香爐の條參照。（『語石』卷下）

⑨「超化寺石香爐讚」は『八瓊室』卷八十に錄文がある。

⑩「李賓彥石香爐記」〔『寰宇訪碑錄』卷五）葉氏も之を引いて  
 る。

⑪葉氏は石盆の條の例にこの雪浪盆を詳述してゐる。

⑫「金石彙目分編』卷十之三、掖縣の條に城東北の天齊廟の  
 「宋石盆紹聖二字」を載せる。之によれば單に紹聖の年  
 號あるのみ、馬衡が紹聖二年としたのは誤らしい。

⑬同卷に同三官廟の宋宣和石盆刻字を著する。

⑭同十六縣州補遺の條に「宋李榮石盆題字」〔嘉定□□釋〕を  
 著錄する。馬氏の石盆が之と同物かどうか判らぬ。

⑮「管太康九年石磴」は山東費縣の出土で「古石抱字錄」に拓  
 影される。

⑯太平興國三年水磴題字は『藝風堂金石目』卷八に著錄せら  
 れる。

⑰吳式芬の『金石彙目分編』卷十之二費縣の條に金蒙山石題  
 字」を著錄し、元祐元年閏九月十三日と記してゐる。馬  
 氏の年記は誤らしい。

（五八頁の北京信通より續く）

目抜き場所は殆んど邦人の占むるところ、然し入口  
 は未だ七千ぐらゐるとか。

運よく自動車が借用出來て、市内の大體を見物しま  
 した。明の故宮趾が割合に残つて居るので、一日をそ  
 れに費し度いと思つて居ます。

中文建設整備資料所をも瞥見しました。標本類の部  
 と圖書部とに分かれて居りますが、前者は中央研究院  
 のものと古物保存所のもので、殷墟のもの、外大し  
 たものはありません。それも後者は金目のものがなく  
 なつて居ます。然し殷墟のものは未だ別にある由です。  
 圖書部は舊地質研究所を以つてあて其書は南京に於け  
 る廿數ヶ所の書を集めたものと云ひ、八十萬冊ぐらゐ  
 ある山、漢籍中舊書は八千卷樓や内閣圖書部（名前は  
 小生自稱）のものが主となつて居るが、良書はないら  
 しい。一見地方誌が多いが或はこれが北京圖書館移換  
 の一部ではないでせうか。（七五頁へ續く）

る結果は大著の補遺に現はれると云ふ。夫人は夫君の内助の役ばかりでなく、仕事に對しても勤勉なる助手であつた。言語研究には必須の儀禮風俗の調査については、婦人たるの特權を以てよく土人の家庭に出入して調査をした。本書は夫人がそれらの見聞を記したのである。篇を分つこと三、章を別つこと二十八。第一篇はギルギット時代の概略から再び東行するの緣起を記してある。第二篇は東方への旅行記。第三篇はハンザ地方での生活記録である。こゝで詳細にハンザの生活風俗習慣儀禮などの見聞を記録してゐるので、名助手たるを彷彿せしめるのである。餘事ではあるが、既に彼等歸國の日も近づく頃に、北京を立つて中亞を旅行しつゝあつたピイター・フレミングの蹤跡が不明と

なつて、タイムス新聞の請ひにより之を搜索せんと氣をもむ内に、フレミングがスキイとホツケイの國際選手エラ・マイヤアル嬢と共に異様の風態で颯爽とハンザへ乗込んでくる話があつて、頗る面白い。

本書はこんな著書であるので、別に直接東洋史界に關係ある記事があるのではない。只一夫人が東洋語學者の夫君を助けて生活する記録として少からざる興味があり、且つは中佐が研究調査した印度西北部地方は極東史家にも關心されるべき土地だから、其地方の見聞記もさう打棄てゝ置くべきものでもないだらうかと思つて、瀏覽の餘、この書の出刊を報ずる次第である。「石濱純太郎」

(七十頁の北京通信より續く) 檔案類は標本部の方で見ましたが、さう大した数ではありません。或は不注意かとも思ふが圖書部にはなかつたと思ひます。それも亦軍機處關係のものは一つもないと云ふ様なことを聞きました。上海で渡邊君にも會つたらもうすこしよく聞いて置きませう。猶圖書部には實録の一部が残つて居ります。これも事變で若干かけた由。今のところ朝天宮にある約三千箱とかのものが問題ですが、元來は二萬とかだつたさうですから破なものはないのではありますまいか。(下略)。……附記これによると山と積み出された北京の文物もどうやら今は南京にはないらしい。丁度この便りを貰つた一兩日前、故宮の方甦生君から「南遷した故宮の文物は大方日本に渡つたといふ話を聞いたが、眞偽の程を知らないか」と聞かれ「そんなことは萬々あるまい」と言つておいたところで彼此思ひ合せて些さかわびしい。今こそ北京にかへしてはんたうの利用價値を發揮し得る様な組織も可能な時だと思ふのだが。(一四、一一、一六 今西記)